

# Masaki Iron Factory and local Community

Seizi MASAKI

Shinsei Kougyo Co.Ltd. President

## 真崎鉄工場と地域社会

真崎精治

新生工業株式会社社長

**Keyword:** japanese vermicelli electromotion motor water mill grand prize

### Abstract

Kannzaki area was the producing district of japanese vermicelli. Terusato Masaki determined the production of the japanese vermicelli and established the Masaki iron factory at Kose in 1877 (Meiji 10). The machine completed in 1881 (Meiji 14). The factory scale expanded by production of the japanese vermicelli. It was the 2nd scale in the iron business scale of Saga Pref. in 1897 (Meiji 30). The production of transformer, mining machinery was started in 1910 (Meiji 43). NIHON Electors Ironworks Co. Ltd. was established in 1918 (Taisho 7).

The electromotion motor that the company produced largely changed the water carriage irrigation of Saga plain. Terusato Masaki had tried the improvement of the machine after that. He was awarded the grand prize exhibitions of 1923 (Taisho 12) and had 29 patents in 1926 (Taisho 15). Saga plain became number one at harvest a ton in 1932 (Showa 7). Although the quipment even Masaki iron factories continued management even after the Second World War. These Factories closed in 1977 (Showa 52).

### 要旨

神埼地域は素麺の生産地であった。素麺づくりには多くの労力を要していたことから、

真崎照郷は製麺機の製作を決意し、明治10年(1877)に巨勢に真崎鉄工場を設立し、明治14年(1881)製麺機を完成させた。製麺機の製作で経営規模も拡大し、明治30年(1897)ごろは、佐賀県の鉄業では2番目の規模であった。

明治43年(1910)には、電動機、変圧機、鉱山機械の製造を開始し、製造範囲を拡大した。大正7年(1918)に日本電気鉄工株式会社を設立した。同社が製作した電動モータが佐賀平野の水利灌漑に大きな変化をもたらした。真崎照郷は、その後も機械機の改善に努め、大正12年(1923)には発明博覧会で豊田織機とともに大賞が授与された。大正15年(1926)には29件の特許を取得していた。昭和7年(1932)に佐賀平野は、電気灌漑の効果もあって反収日本一となった。第二次世界大戦後も真崎鉄工所は経営を続けたが、昭和52年(1977)に閉鎖した。

### 1 真崎照郷と製麺機

真崎照郷は、嘉永4年(1851)に佐賀郡巨瀬村に生まれた。家は酒造業であった。ジェームズ・ワットの蒸気機関発明に刺激されて発明を志すようになったと言われている。

明治7年(1874)に測量機として真崎円度を造った。その後、神埼地域は江戸初期から素麺の生産地であったことから、製麺機の製作を目指すようになった。神埼地域の素麺生産は17世紀なかごろに雲水から製法が伝えられたことに由来するとされている。

明治10年(1877)に真崎鉄工場を設立した。製麺機製作の努力を続け、明治14年(188

1) に原料小麦粉の成分について研究し、この考察を基に明治16年(1883)に試作機を製作した。翌17年特許申請を行ったが、特許法の不備で取得出来なかった。特許申請の帰途に立ち寄った名古屋で、うどんの需要が高いことから製麺機をとりよせてうどん製造を始めた。当初は順調であったが、同地の業者が対抗するようになったことから経営不振になり帰郷した。明治21年(1888)3月に「麺類製造器機」の特許が取得できた。工業製品の特許では4番目であった。特許に基づく日本で最初の製麺機であった。その後も改良に努めて改良機を製作し、明治27年(1894)に特許を取得した。

## 2 明治中後期の佐賀経済と真崎鉄

### 工場

明治24年に鳥栖から佐賀間に鉄道が開通したように、佐賀地域も次第に近代化が進展してきた。この時期の産業で活気を呈していたのは石炭産業で、機械産業は殆ど進展していなかった。

明治17年の佐賀県統計によれば、素麺の郡別生産では、小城郡と神埼郡しか出ていないが、小城郡は12万斤であるのに対して、神埼郡は112万斤とあり、小城郡の10倍の生産であった。真崎照郷の製麺機はまだ普及していなかったが、製麺機が普及してくるようになった明治20年代後半期には神埼地域の素麺生産はさらに発展した。

明治30年の佐賀県統計書の「工業会社及製造」には、製造所として真崎鉄工場が記載されている。製造品種としては製麺器機、所在地は佐賀郡古瀬村、持主名は真崎照郷、創業年月は明治28年9月、職工は男48人とある。窯業以外で従業員が40人以上の会社は3社しかなかった。最も従業員が多かったのは谷口鉄工場で58人であった。

谷口鉄工場は、幕末期に構築された反射炉の操業に携わった谷口清右衛門に系譜し、谷口清八が明治15年3月に設立した会社で、佐賀市長瀬町に所在した。諸器機制作と統計書には出ている。当時、佐賀県は石炭産業が盛んであった。幕末期は相知・厳木地域で石炭採掘の中心であつたが、蒸気ポンプが導入されたことから、小城・多久地域も石炭採掘が進展した。

谷口鉄工場は蒸気ポンプで汲み出された水の排水用に排水管を供給し、石炭産業の進展とともに経営を拡大してきた。谷口鉄工所が多く従業員がいたのは石炭産業連関に由来していた。

明治30年の佐賀県産物の県外移出では、第1位

が米、2位が磁器、3位が石炭であり、石炭の移出額160万円に対して、素麺は9万円にすぎなかった。

石炭の移出先が長崎、門司、神戸、福岡、東京、大坂、朝鮮、中国と主要都市及び朝鮮や中国まで及んでいたのに、素麺は鹿児島、福岡、長崎、若津、天草と九州圏内であり、販路からして限られていた。

明治35年の佐賀県統計書の「工業貴社及製造所」の項目では、真崎鉄工場が製造品種として製麺機及諸器械、所在が佐賀市巨勢村、持主が真崎照郷、操業年月が明治28年9月と出ている。

明治35年には佐賀地域も器械製作所が存在するようになった。

谷口鉄工場は佐賀地域では最も規模が大きい製作所で、炭鉱用蒸気器械、巻揚器機、鑄鉄管、車輛旋盤選炭機、扇風器、鉄館、原動機などを製作していた。谷口鉄工場に次ぐのが野口健蔵が経営する佐賀器械製作所であった。創業は明治12年2月で佐賀市松原町に所在し、製造品種は「電気理化学蒸気器機」であった。

真崎鉄工場は従業員では3位で「製麺器及諸器械」とあり。製麺器の他の器機を製造するようになっている。

唐津地域では、芳谷炭坑付属工場が蒸気器機、炭車の製作所と存在し、九州鉄道唐津工場が鉄道諸車輛の修繕、線路保全と布設用具の製造をおこなっていた。

このような状況の中で、真崎鉄工場は、明治43年(1910)に事業を拡大して、電気諸機械と高圧タービンポンプの製造を開始し新しい段階に入った。

## 3 大正期の真崎鉄工場

大正期の麺業関係の状況を、大正3年(1914)の佐賀県統計書から見れば、素麺の生産額は神埼郡が160万円で佐賀県内では第1位で、2位の小城郡が80万5千円であるので、神埼郡は小城郡のほぼ2倍の生産額であった。素麺製造戸数においても、神埼郡が134戸、小城郡が61戸で、神埼郡が小城郡の2倍の素麺製造家が存在していた。

神埼郡が素麺製造と関連して干うどんの生産も進展していたが、素麺製造ほどではなかった。干うどん製造額では佐賀郡4万8千円、小城郡3万1千円、三養基郡2万2千円、神埼郡2万円で、神埼郡は佐賀郡の半分程度であった。

真崎照郷が発明した製麺機が早くから素麺生産地であった神埼地域を素麺の特産地としての発展をもたらした

工場状況から見れば、大正3年には真崎鉄工場も発展していることが窺える。

工場として規模が大きかったのは谷口鉄工場で従業員457人、蒸気機関1台、電気動力機4台を装備している。授業員数で谷口鉄工場に次ぐのが唐津鉄工場で170人が働いていた。3位が佐賀セメント工場で165人が就労していた。佐賀セメント工場は明治31年に建てられた工場であった。4位に真崎鉄工場が位置している。従業員123人、蒸気機関1台、電気動力機2台を装置していた。

真崎鉄工場の製麺機は、神埼地域の素麺生産の発展に寄与し、それが製麺機の需要の増加となり、経営規模の拡大をもたらしている。企業としての大きな転換は明治43年の電気諸機械と高圧タービンポンプの製造を開始であった。

これらの機械は製品の質の良さから大正5年（1916）には佐世保と呉の海軍工廠の指定工場になった。

大正7年に真崎鉄工場はさらに質的な発展をした。真崎照郷は電気機器の生産拡大を決意して、製麺機製作権を除いて、諸機械製作権、営業権、諸施設を基に資本金150万円の日本電機鉄工株式会社を同年10月に設立した。本社を佐賀の高尾、分工場を神野に設けた。本社は敷地1678坪、5棟695坪の建物、神野分工場は敷地1046坪、建物251坪であった。（1）

社長には藤山雷太を迎えた。藤山雷太は伊万里の大里村出身で、長崎県会議員を経て三井銀行に入社し、以後、大日本精糖社長、東京商業会議所会頭など実業会で多彩な活動をしていた。

日本電機鉄工株式会社の事業としての特徴は、当同社が生産した電動ポンプが佐賀平野の電気灌漑を促進したことにある。

## 4 電気灌漑事業

佐賀平野はクリークが多いことから、自然流水によって、圃場に水を供給することが出来ず、クリークからの水車を使って揚水が必要であった。早魃のおりは、3段に組み圃場に給水することも行われた。

電気灌漑事業に携わったのが真崎悟一であった。

真崎照郷の長男で、明治38年に東高等商業学校卒業し、その後、真崎鉄工場の経営に従事していた。

大井手普通水利組合がまとめによれば、電気灌漑の目的を「夏季稲作灌漑用ニ供スル足踏水車ヲ廃シ、電気ポンプヲ以テ之ニ代ヘ灌漑ニ要スル労力ノ節約ヲ図ルコト」と記している。（2）

佐賀平野における電機ポンプによる灌漑事業は、大正11年と12年に行われた。12カ村の4224ヘクタールに及んだ。その後さらに広がり、大正15年には730ヘクタールに電機灌漑が普及し大規模になった。

電機灌漑の普及によって、米の反当たり収量も増加した。佐賀郡では昭和9年が3石3升、昭和13年には3石2斗5升と3石台に達している。佐賀県全体では9年が2石5斗4升、13年が2石7斗5升と3石台に及んでいない。佐賀郡は佐賀県内のみならず、全国でも、昭和8年（1933）には、反収で日本一となり、米づくりにおける「佐賀段階」を形成した。（3）

## 5 まとめ

真崎鉄工場は素麺機によって発展した。それは神埼地域の素麺業の拡大となった。

大正7年には日本電機鉄工株式会となり、会社が供給した電気ポンプが佐賀平野の灌漑に用いられ、佐賀郡が昭和8年に反収で日本一になる要因を形成した。

企業が地域社会の在り方を変化させた事例として位置付けることが出来る。

## 参考文献

- [1]酒井福松『佐賀県の事業と人物』（1923）8～9頁。
- [2]嘉瀬川農業水利史編纂委員会『嘉瀬川農業水利史』（九州農政局嘉瀬川農業水利事務所、1973）81頁
- [3]佐賀県農業史編纂委員会『佐賀県農業史』（佐賀県、1967）372～376頁。